HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	平成21 年度北海道大学教育ワークショップ報告
Author(s)	西森, 敏之; 安藤, 厚; 細川, 敏幸 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 18, 165-185
Issue Date	2011-01
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.18.165
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56763
Type	departmental bulletin paper
File Information	JHELL18_022.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

A Report on the 2009 Hokkaido University Workshops on Education

Toshiyuki Nishimori,[1)]* Atsushi Ando,[2)] Toshiyuki Hosokawa,[1)] Kunimasa Yamada,[1)]
Midori Yamagishi,[1)] Makoto Suzuki[1)] and Fumihito Ikeda[1)]

1) Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University
2) Professor emeritus, Hokkaido University

平成 21 年度北海道大学教育ワークショップ報告

西森　敏之[1)]**, 安藤　厚[2)], 細川　敏幸[1)], 山田　邦雅[1)],
山岸　みどり[1)], 鈴木　誠[1)], 池田　文人[1)]

1) 北海道大学高等教育推進機構, 2) 北海道大学名誉教授

Abstract — Hokkaido University began a two-day workshop on education for the faculty members in 1998. Since then, we have held it once a year. From 2007 our workshops have been conducted twice a year and their target became young faculty members. The purpose of this report is to explain what was done in the two-day workshops held in 2009.

The first two-day workshop (in June) had 32 participants from all over Hokkaido University, while the second one (in November) had 30 participants from all over Hokkaido University and 13 participants from 11 other institutions. The main theme was to learn how to develop new courses. Furthermore, we choose an additional theme each year, and that of the 2009 workshops was how to use the e-learning systems. All of the workshops had (1) three sessions about planning of courses, each of which consisted of minilectures, small group discussions and a general discussion, and (2) two special lectures, one about the e-learning systems and the other about an electric apparatus called a clicker. The main contents of this report are the syllabi of the courses worked out in the workshops.

(Received on 20 November, 2010)

*) Correspondence: Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan
**) 連絡先：060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目　北海道大学高等教育推進機構

1. はじめに

「北海道大学教育ワークショップ」は，1 泊 2 日の全学 FD であり，第 1 回目が 1998 年 11 月に開催された。以後毎年 1 回行われてきたが，研修対象を北大に赴任してから 5 年以内の若手教員にするようになった。2007 年度からは，新任教員研修をさらに充実させるため，それまで 6 月に行われてきた 1 日コースの「新任教員研修会」も代わりに 1 泊 2 日のワークショップを行うことになり，結局，1 年に 2 回，「北海道大学教育ワークショップ」が開催されることになった。

6 月のワークショップは，北大の教員のみを対象としているが，11 月のワークショップは若干名の他機関からの参加者を募っている。2009 年 11 月のワークショップからは，「北海道地区 FD･SD 推進協議会」の加盟校にもキャパシティの関係から若干名の方々に参加していただける旨の案内を出している。

この報告は，2009 年度に，6 月と 11 月に行われた 2 回の「北海道大学教育ワークショップ」の内容と，そこで得られた成果（すなわち，参加者によりグループごとに作成された新しい科目のシラバス）の記録である。

2. 2009 年 6 月の「北海道大学教育ワークショップ」（第 14 回）

2.1 参加者，プログラムなど

2009 年 6 月 5 日（金），6 日（土）の両日，奈井江町農業改善センター（奈井江温泉ホテル北乃湯）で，第 14 回目の北海道大学教育ワークショップ(FD) が行われた。

今回の参加者は，本学の研究科及び研究所等から（主に北大に着任後 5 年以内の若手）教員 32 名に，世話人，講師，事務職員など合わせて総勢 41 名であった。

このワークショップのメインプログラムは，グループ作業により新しい授業を設計してシラバスとして表現することであるが，2009 年度のサブテーマは，「授業を変える e- ラーニング」であり，実演と演習「e- ラーニング入門」とミニレクチャー「クリッカーを使う授業」が組み込まれている。

1 日目の 6 月 6 日は，事務局大会議室に集合した後，研修会場の奈井江温泉行きのバスで出発し，高速道路に乗ってから，例年のように，参加者の自己紹介で研修会が和やかな雰囲気で始まった。表 1 のプログラムのように，会場到着後記念写真（写真 1）を撮り，脇田副学長の挨拶（写真 2）ののち，細川敏幸教授によるミニ講義「FD の目的と意義」，山田邦雅准教授による実演と演習「e- ラーニング入門」があって，昼食となった。

昼食後，研修のオリエンテーションとして，講演会でなく参加者がグループ作業をして成果を上げるという意味で「ワークショップ」という用語を使っていることを説明し，作業がスムーズに進行するために重要なアイスブレーキングを，グループ名を決めるとか小さな課題をいくつかグループ作業で行い，本格的なグループ作業に入るための準備を行った（写真 3）。

ワークショップのメインプログラムでは，参加者を 4 グループに分け，学生に魅力ある授業にするための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題で，グループ作業を行った。

授業の設計は，3 回のセッションに分けられ，(I) 科目名と目標，(II) 方略（15 回分の授業内容），(III) 評価基準，の順に行われた。おのおののセッションは，

(1) 30 分程度のミニ講義，
(2) 小グループでの 60 分の討論（写真 4,6,8,10）
(3) 討論の成果の発表会（写真 5,7,9,11），

という 3 つの部分からなっている。

より具体的には，参加者全員を名簿順に A，B，C，D，A，B，C，D，… のようにグループ分けし，各グループがさまざまな専門の人たちからなるようにした。それぞれのグループには，授業のタイプをあらかじめ指定されていて，具体的には

A：一般教育演習（学生数 20）
B：一般教育演習／フィールド体験型
（学生数 20，学外での 1 週間の集中授業）
C：総合科目（6 名程度の講師が交代で行う）
D：大学院共通授業（6 名の学部長が等が講師）

のような設定の科目を設計するという課題に挑んだ。

1 日目は，午後に，「科目名と目標」と「方略（15

表 1．第 14 回北海道大学教育ワークショップ（平成 21 年 6 月全学 FD）のプログラム

2009 年 6 月 5 日（金）

8:15 受付 事務局（正門入って右の建物）大会議室に集合
8:30 バス出発 研修開始：オリエンテーション（挨拶，自己紹介）
9:45 ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真

10:00 挨拶 高等教育機能開発総合センター長 脇田副学長（20 分）

10:25 ミニレクチャー「FD の目的と意義」（25 分 + 質問 5 分）

10:55 休憩（15 分）

11:10 実演と演習「e- ラーニング入門」（50 分）

12:00 昼食 60 分

13:00 研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング（30 分）

13:30 ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」（30 分）
14:00 グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
14:10 グループ作業 I「授業の設計 1: 科目名・目標の設定」（60 分）
15:10 発表・全体討論（40 分）

15:50 休憩（20 分）

16:10 ミニレクチャー「教育方略」（30 分）
16:40 グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
16:50 グループ作業 II「授業の設計 2:（目標の手直しと）方略」（60 分）
17:50 発表・全体討論（40 分）

18:30 夕食（40 分）
19:10 ミニレクチャー「クリッカーを使う授業」（30 分 + 質問 10 分）
20:00 懇親会

2009 年 6 月 6 日（土）

7:30 朝食

8:30 ミニレクチャー「教育評価」（30 分）
9:00 グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
9:10 グループ作業 III「授業の設計 3:（方略の手直しと）評価」（60 分）
10:10 発表・全体討論（40 分）

10:50 休憩（10 分）

11:00 修了証授与式
11:10 参加者の個人的感想や意見（50 分）

12:00 昼食（60 分）

13:00 バス出発
14:30 JR 札幌駅北口到着

回分の授業内容)」，についてのグループ討論を行った。

夕食後には，山田邦雅准教授による講演「クリッカーを使う授業」(写真 12) を行い，その後懇親会を行った。

2 日目の午前に，「評価基準」についてのグループ討論を行い，1 日目と合わせて 3 回のセッションに分けてシラバスを作成した。最後に，このワークショップで初めての修了証授与式 (写真 13) があった。

2.2 プロダクト

2009 年 6 月のワークショップで得られたプロダクト (シラバス) を紹介することにして，まず目次代わりに科目名のみを紹介しておく。

＜グループ A ＞
　一般教育演習 「食から見た北海道」
＜グループ B ＞
　一般教育演習／フィールド体験型 「ススキノ地域社会論～ススキノレジデンシー～」
＜グループ C ＞
　総合科目 「豊かな生活を目指す環境科学」
＜グループ D ＞
　大学院共通授業 「生命科学と人間社会」



写真 1. 記念写真



写真 2. 脇田稔理事・副学長の挨拶



写真 3. アイス・ブレーキング

グループ A のシラバス　（2009 年 6 月）

眞嶋　俊造，金澤　誠，小華和　柾志，齋藤　有紀，
海津　裕，堀之内　武，荻田　珠江，亀井　敬，佐羽内　喜久子

＜科目名＞　一般教育演習　「食から見た北海道」

＜一般目標＞
①身近な北海道の食を題材にして調査方法を学ぶ
②北海道の産業構造を知る
③北海道産の価値を理解するためにブランドイメージの構造を知る
④食品産業における事故例より安全確保と危機管理を学ぶ

＜行動目標＞
①調査に基づいて論理的に表現できる
②北海道産食品を科学的に区別する方法を列挙できる
③北海道の食糧産業の現状を把握し，将来の方向性を提言できる
④食糧産業に潜むリスクを概説できる

＜学習方略＞
第 1 回～ 2 回　ガイダンス　・文献検索法，・レポート作成法，・図書館利用法
第 3 回～ 4 回　北海道の食　～あなたは何を想像しますか？～
第 5 回～ 6 回　食のブランド　～博多の北海道産明太子 v.s. インカのめざめ～
第 7 回～ 8 回　北海道の食品産業　～ポテトチップの農商工～
第 9 回～ 10 回　事故例 / 倫理 / リスク　～ミートホープレス～
第 11 回～ 12 回　食における DNA 判定
第 13 回～ 14 回　問題と展望
第 15 回　総括（大レポート）

＜評価＞
・ アクティビティー　５０％
　発言数，メールによる多重レスポンスの数
・ レポート　（小レポート５％× 6，大レポート２０％　：　計５０％）
　—行動目標①　参考文献の数，体裁
　行動目標②～④　文字数，内容の評価
・ 成績は相対評価



写真 4．グループ討論（グループ A）



写真 5．発表（グループ A）

グループ B のシラバス　（2009 年 6 月）

敷田　麻実，樋渡　雅人，渋谷　真希子，梶原　逸朗，
柏木　純一，水田　元太，神　　繁樹，北村　秀光

＜科目名＞　一般教育演習／フィールド体験型
「科目名ススキノ地域社会論〜ススキノレジデンシー〜」

＜一般目標＞
地域の社会的問題を認識し，提起できる能力を身につけるために，社会問題のるつぼであるススキノの飲食店を事例に体験・分析する

＜行動目標＞
①さまざまな人と十分コミュニケーションができる
②インタビュー調査の設計ができる
③経営（マネージメント）に関する基本が理解できる
④法律や制度（雇用，衛生，教育）の基本が理解できる
⑤さまざまな問題点に対する解決法を提示できる
⑥成果を取りまとめ，発表することができる

＜学習方略＞
1 日目　講義（地理・歴史）およびススキノでの現地調査
2 日目　インタビュー手法の習得および就業体験
3 日目　問題発見と分析
4 日目　経営・雇用・衛生・教育に関する問題解決の考察
5 日目　成果発表と評価

＜評価＞
・一日目の評価基準
ショートレポート：ススキノの地理・歴史を理解したか，
調査記録：ヒアリングした人数，証拠の提示（名刺，マッチ，写真など）
・二日目の評価基準
発表：発表の基本（話し方などなど）
評価シート：他のグループの発表の感想・評価（グループ間の情報共有）
インタビュー記録：誰にインタビューしたか（証拠）
・三日目の評価基準
発表：発表の観察評価に準ずる，
評価シート：他のグループの発表の感想・評価（グループ間の情報共有），
ショートレポート：個人調査内容の的確性，問題提起の的確性と調査資料との整合性
・ 四日目の評価基準
発表：発表の観察評価に準ずる，問題提起の的確性とグループ間の意見交換の度合
ショートレポート：専門家の意見を踏まえた問題解決の的確性
・ 五日目の評価基準
発表：発表の観察評価に準ずる，聴衆（関係者）の関心を得られたか
【総合評価の割合】
発表＆ショートレポート ...60%，積極的参加 ...20%，知識吸収 ...20%

1日目　講義（地理・歴史）およびススキノでの現地調査

時間	内容	目標	場所	その他	評価
午前	ガイダンスとグループ分け	授業の目標と全体像を理解できる	大学	講義形式	
午後	地理歴史	ススキノの地理と歴史を理解できる	大学・ススキノ	講義形式とフィールドワーク	ショートレポート
夜間	体験学習（ヒアリング）	ススキノの現状を把握し、記録を作成できる	ススキノ	フィールドワーク	調査記録

2日目　インタビュー手法の習得および就業体験

時間	内容	目標	場所	その他	評価
午前	一日目の成果を発表	グループ間で一日目の成果を発表し情報を共有できる	大学	発表形式	発表と評価シート
午後	インタビューについてのガイダンスと模擬練習	インタビューの設計ができる	大学	講義形式と実習	
夜間	体験学習（就業体験とインタビュー）	就業現場の実状を把握し、記録を作成できる	ススキノ	フィールドワーク	インタビュー記録

3日目　問題発見と分析

時間	内容	目標	場所	その他	評価
午前	二日目の成果を発表	グループ間で二日目の成果を発表し情報を共有できる	大学	発表形式	発表と評価シート
午後	社会問題の発掘と整理	自主的な資料調査に基づいた課題設定ができる	大学	個人調査	
夜間	社会問題の発掘と整理	自主的な資料調査に基づいた課題設定ができる	大学	ディスカッション形式・グループワーク	ショートレポート

4日目　経営・雇用・衛生・教育に関する問題解決の考察

時間	内容	目標	場所	その他	評価
午前	三日目の成果を発表	グループ間で三日目の成果を発表し情報を共有できる	大学	発表形式	発表
午後	専門家を交えた問題分析	専門家の知識を活用できる	大学	ディスカッション形式・グループワーク	
夜間	専門家とススキノツアー	問題解決の方策をフィードバックできる	ススキノ	フィールドワーク	ショートレポート

5日目　成果発表と評価

時間	内容	目標	場所	その他	評価
午前	発表準備	得られた成果をまとめることができる	大学	グループワーク	
午後	発表準備とリハーサル	プレゼンテーションの技術を習得できる	大学	グループワーク	
夜間	総合発表（打ち上げ）	地域関係者に理解されるようなプレゼンテーションができる	ススキノキリンビール園	発表形式・ディスカッション	発表



写真 6. グループ討論（グループ B）



写真 7. 発表（グループ B）

グループ C のシラバス　（2009 年 6 月）

鳥山　まどか，小林　隆史，川村　直人，福島　正巳，
伊達　浩昭，菅原　一幸，関　　宰，角山　寛規

＜科目名＞　総合科目「豊かな生活を目指す環境科学」

＜概要＞

科学技術の発展に伴って人間がこれまで環境に何をしてきたか？その結果，地球環境がどうなっているか？人間の暮らしを豊かにしていくためにはどうすれば良いのか？本講義では，科学技術による人間社会活動の歴史，地球に与えてきた影響，ならびに，廃棄物のリサイクル技術，について学ぶ。

＜一般目標＞

①産業革命以降の人間活動が地球環境に与えてきた事実を理解する。
②豊かな生活ならびにそれを実現するための環境科学について考える力を養う。

＜行動目標＞

①人間活動が地球環境に与えてきた影響を列挙すると共に歴史的に系統立てる。
②現在の環境科学技術の動向を理解する。
③ QOL の概念を理解し，それを高める方法を学ぶ。

＜学習方略＞

①ガイダンス
②豊かさの指標 QOL
③科学技術の歴史と環境破壊
④産業と公害
⑤公害訴訟（外部講師）
⑥地球温暖化と生態系
⑦企業の取り組み（外部講師）
⑧行政の取り組み（外部講師）
⑨循環型社会の構築
⑩代替エネルギー
⑪グリーンケミストリー（外部講師）
⑫大気・土壌・水質汚染の対策
⑬廃棄物のリサイクル
⑭環境科学技術の効果を QOL で測る
⑮ QOL を高める環境科学を考える
　グループディスカッション

＜評価＞

講義内小テスト（クリッカー）.....10%
レポート 60%
発表内容 30%



写真 8．グループ討論（グループ C）

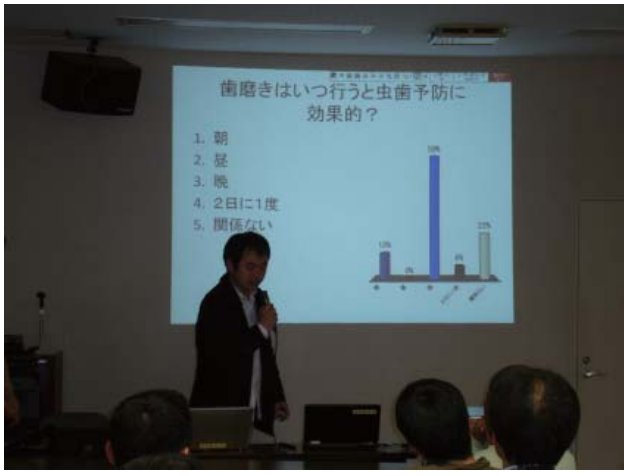


写真 9．発表（グループ C）

グループ D のシラバス　（2009 年 6 月）

下村　太一，唐　　煒，小原　圭介，堺井　亮介，
小川　貴弘，金山　　準，村澤　尚樹，中路　達郎

＜科目名＞　総合科目「生命科学と人間社会」

＜一般目標＞

①生命科学の最先端の知識を理解し，現状での成果を評価する能力を身につける
②生命科学が抱える問題点を解決するために，現在の社会制度に関して考察する能力及び問題解決に向けた提言を行う能力を身につける。

＜行動目標＞

①最先端の科学技術に関する知識を理解し，整理して記述できる。
②社会生活における科学技術の成果を確認し，評価を行うことができる。
③問題を発見し，解決に向けた提言を行うことができる。

＜学習方略＞

第 1, 2 回　＜ガイダンス＞＆ [講義] 生命科学の基礎的な知識の理解
(生物細胞学，DNA，脳科学，etc…)
第 3,4,5 回 [講義] 最先端の生命科学の応用分野への紹介，
成果と課題（再生医療，人工臓器）
第 6 回　[グループ発表＆討論] 生命科学分野での成果と課題の整理と発見
第 7,8 回　[講義] 生命科学と産業の関わりの紹介
第 9 回　企業への実地見学
第 10,11 回 [講義] 生命科学が及ぼす倫理的問題の理解
第 12,13 回 [講義] 倫理的問題を踏まえた法規制と社会基盤の理解
第 14,15 回 グループ発表＆討論（各分野での課題の解決策）

＜評価＞

評価項目：
生命科学に関する最低限の知識（専門用語の理解等）
生命科学の成果に関する評価と課題の整理，　課題の解決の提言
評価方法及び比重：
小テスト (評価項目の 1. に対応，出席を兼ねる。.....10%
質問やコメントを記載させ，能動的参加を評価）
企業実地見学レポート (評価項目の 2. 及び 3. に対応).....20%
グループ発表 (評価項目の 2. 及び 3. に対応).....20%
最終レポート (評価項目の 2. 及び 3. に対応).....50%



写真 10．グループ討論（グループ D）



写真 11．発表（グループ D）



写真 12．山田特任准教授のミニ講義



写真 13．終了証書授与式

3．2009 年 11 月の「北海道大学教育ワークショップ」（第 15 回）

3.1 参加者，プログラムなど

2009 年 11 月 6 日（金），7 日（土）の両日，奈井江町農業改善センター（奈井江温泉ホテル北乃湯）で，第 15 回目の北海道大学教育ワークショップ(FD)が行われた。

今回の参加者は，本学の研究科及び研究所等から（主に北大に着任後 5 年以内の若手）教員とアカデミックサポート職員合わせて 30 名，他機関からの参加者 13 名に，世話人，講師，事務職員など合わせて総勢 42 名であった。

このワークショップのメインプログラムは，6 月の第 14 回と同じく，グループ作業により新しい授業を設計してシラバスとして表現することであるが，2009 年度のサブテーマは，「授業を変える e- ラーニング」であり，実演と演習「e- ラーニング入門」とミニレクチャー「クリッカーを使う授業」が組み込まれている点は同じである。

1 日目の 11 月 7 日は，情報教育館 1 階ロビーに

集合した後，研修会場の奈井江温泉行きのバスで出発し，高速道路に乗ってから，例年のように，参加者の自己紹介で研修会が和やかな雰囲気で始まった。表 1 のプログラムのように，会場到着後記念写真（写真 14）を撮り，本堂武夫理事・副学長の挨拶（写真 15）ののち，細川敏幸教授によるミニ講義「FD の目的と意義」，山田邦雅准教授による実演と演習「e-ラーニング入門」があって，昼食となった。

昼食後，研修のオリエンテーション，アイスブレーキングと，本格的なグループ作業に入るための準備を行った（写真 16）。

ワークショップのメインプログラムでは，受講者が 43 名在ったので，5 グループに分け，新しい授業を設計するという課題で，ミニ講義（写真 17），



写真 14．2009 年 11 月のワークショップの記念写真



写真 15．本堂副学長の挨拶



写真 16．アイス・ブレーキング

第 15 回 北海道大学教育ワークショップ　プログラム

2009 年 11 月 6 日（金）

8:15　受付　北海道大学・情報教育館（図書館北分館の北隣）　1 階ロビー　集合
8:30　バス出発　研修開始：オリエンテーション（挨拶 , 自己紹介）
9:45　ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真

10:00　挨拶　北大総長または高等教育機能開発総合センター長？？？（20 分）

10:25　ミニレクチャー「FD の目的と意義」（25 分 + 質問 5 分）

10:55　休憩（15 分）

11:10　実演と演習「e- ラーニング入門」（50 分）

12:00　昼食 60 分

13:00　研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング（30 分）

13:30　ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」（30 分）
14:00　グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
14:10　グループ作業 I「授業の設計 1: 科目名・目標の設定」（60 分）
15:10　発表・全体討論（50 分）

16:00　休憩（20 分）

16:20　ミニレクチャー「教育方略」（30 分）
16:50　グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
17:00　グループ作業 II「授業の設計 2:（目標の手直しと）方略」（60 分）
18:00　発表・全体討論（50 分）

18:50　夕食（40 分）
19:30　ミニレクチャー「クリッカーを使う授業」（30 分 + 質問 10 分）
20:10　懇親会

2009 年 11 月 7 日（土）

7:30　朝食

8:30　ミニレクチャー「教育評価」（30 分）
9:00　グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
9:10　グループ作業 III「授業の設計 3：（方略の手直しと）評価」（60 分）
10:10　発表・全体討論（60 分）　　—休憩（10 分）—

11:20　参加者の個人的感想や意見（40 分）

12:00　昼食（60 分）

13:00　バス出発
14:30　JR 札幌駅北口到着



写真 17．山岸みどり教授のミニ講義



写真 18．修了証授与式

グループ討論，全体発表をセットにして，3 セッションを行った。各グループに指定された科目のタイプは

A：一般教育演習（学生数 20）
B：一般教育演習（学生数 20）
C：一般教育演習／フィールド体験型
（学生数 20，学外での 1 週間の集中授業）
D：総合科目（6 名程度の講師が交代で行う）
E：総合科目（6 名程度の講師が交代で行う）

であった。

1 日目の夕食後には，「クリッカーを使う授業」というミニ講義を行った。そのあと，和室に集まって懇親会が行われ，普段顔を合わせることのない他部局の教員間での会話ということで盛り上がった。

2 日目は午前中に「評価」について最後のグループ作業と発表を行い，コーヒーで休憩をとってから，修了証授与式（写真 18）があり，参加者がワークショップについての感想を述べた後，昼食を取り，バスに乗って帰途についた。

3.2 プロダクト

2009 年 11 月のワークショップで得られたプロダクト（シラバス）を紹介することにして，まず目次代わりに科目名のみを紹介しておく。

＜グループ A ＞
一般教育演習「大学を 100 倍楽しむ方法」
＜グループ B ＞
一般教育演習「表現の作法」
＜グループ C ＞
一般教育演習／フィールド体験型
「北海道における酪農を知ろう！」
＜グループ D ＞
総合科目「環境と人間」
講義題目「環境と社会のあいだ」
＜グループ E ＞
総合科目「環境と人間」
講義題目「地球環境の未来像」

グループ A のシラバス　（2009 年 11 月）

李　連珠，志賀　哲，岡本　一将，今村　央，荒木　奈緒，
福元　隆浩，和地　輝仁，遠藤　雄一，植月　美希

＜科目名＞　一般教育演習「大学を 100 倍楽しむ方法」

＜一般目標＞
大学生活を充実したものとし，楽しむために，
①自分自身を理解する
②将来の目標を見つける

＜行動目標＞
①自分自身を理解するための知識，あるいはスキルを説明できる。ー＞小テスト
②自分自身を他者，および自分自身で分析し，客観的に説明できる。
　ー＞レポート，プレゼン，グループディスカッション
③先達の事例を調べ，それについて説明できる。ー＞レポート
④将来の目標，あるいはそのヒントを見つけ，目標を達成するための過程を説明できる。
　ー＞プレゼン，レポート，グループディスカッション

＜学習方略＞
① Introduction（講義とグループ分け）
　レポート提出：e learning 自分のヒストリーを文章にする（TA チェック）
②論理的で解りやすい文章の書き方 1 (講義)
　e learning:　小テスト
③論理的で解りやすい文章の書き方 2（グループ討論）
④心理学へのいざないー今の自分の分析ー
⑤心理学概論（コミュニケーションスキル含む）
⑥プレゼンテーション　　（自分の過去・現在）
⑦プレゼンテーション　　（自分の過去・現在）
　課題提出：現在の自分についての分析（TA チェック）
⑧特別講演 1（僕が 100 倍楽しんだ理由）
⑨特別講演 2（僕が 100 倍楽しんだ理由）
　課題提出：特別講演を聞いて感じたこと
⑩情報収集の方法論（講義）
　e learning：小テスト
⑪インターネットの有効利用（講義）
　課題提出：100 倍楽しんだ人の他の人 / 挫折した人の事例
⑫プレゼンテーション：卒業後の自分
⑬グループ討論：次の夢の見つけ方
⑭情報収集の実践
　課題提出：私が大学生活を 100 倍楽しむ方法
⑮総括

＜評価＞
最低でも 12 回もしくはそれ以上の回数の出席とすべての課題の提出（5 回）を必要とする。
学習態度 5%
小テスト（2 回）の点数..... 5%
討論 (2 回）への取り組み，意見発表などの積極性..... 20%
成果発表 (2 回）の内容と発表態度..... 20%
レポート (5 回）の内容（論理性を含む) 50%

合計点について　　90 点以上：秀，　80 点以上から 89 点：優，
70 点以上から 79 点：良，　60 点以上から 69 点：可，　0 点から 59 点：不可



写真 19．グループ討論（グループ A）



写真 20．発表（グループ A）

グループ B のシラバス　（2009 年 11 月）

猪瀬　優理，前澤　仁志，仁木　剛史，川口　俊一，日吉　大輔，
青山　和佳，渡辺　美知子，千葉　芳広，宮下　徹

＜科目名＞　一般教育演習「表現の作法」

＜一般目標＞
①必要な表現の作法を修得するために，論理的な思考を身につける。
②多様なバックグラウンドを持つ人と討論ができるように，コミュニケーション能力を身につける。
③理系文系を問わず，学際的な思考力を身につける。

＜行動目標＞
①課題に対する問題設定能力を身につける。
②課題に対する必要な情報を収集することができる。
③小論文を書けるようにする
④プレゼンテーションができる。

＜学習方略＞

	内容	方略
①ガイダンス	15 回分の内容　雰囲気づくり	講義　アイスブレーク
②ガイダンス	論理展開の学習イラストによる表現学習	講義　イラスト
③ガイダンス	テーマ（国語について）を与える	講義
	情報の調べ方	講義

内容：社会問題について	方略
④問題提起	ブレインストーミング
⑤情報収集	情報収集，グループ討論
⑥問題解決，コミュニケーション	プレゼンテーション　討論　(e-learning 提出)
⑦問題解決，コミュニケーション	小論文発表

内容：環境問題について	方略
⑧問題提起	ブレインストーミング
⑨情報収集	情報収集，グループ討論
⑩問題解決，コミュニケーション	プレゼンテーション　討論
⑪問題解決，コミュニケーション	小論文発表
内容：健康について	方略
⑫問題提起	ブレインストーミング
⑬情報収集	情報収集，グループ討論
⑭問題解決，コミュニケーション	プレゼンテーション　討論
⑮問題解決，コミュニケーション	模擬学会

＜評価＞

(教員と学生の五段階評価)

①課題設定能力　・テーマが明確

②情報収集能力　・論文の読解力　・情報の取捨選択

③表現力 (文章力，イラスト，話し方)

・発表時間厳守　・積極性　・表現力の適切さ　・発表の補助手段

④論理的思考力　・全体の構成　・論理の展開性

(評価方法)

・発表の評価は，教員と学生で五段階評価とする。

・討論の評価は，教員の五段階評価とする。

・小論文の評価は，教員の五段階評価とする。

・評価比重は，それぞれ同等とする。



写真 21．グループ討論（グループ B）



写真 22．発表（グループ B）

グループ C のシラバス　（2009 年 11 月）

宮盛　邦友，南保　明日香，加藤　英介，梅澤　大樹，
坂口　紀史，斉藤　準，早川　吉彦，梅田　純代

＜科目名＞　一般教育演習／フィールド体験型「北海道における酪農を知ろう！」

＜概要＞
5 日間のフィールド体験を通じて北海道の農村部の現状，問題点を見出し，その解決策を考える。

＜一般目標＞
北海道の農村での問題点を認識するために，自分の身体をもって体験し，解決策を考える。

＜行動目標＞
①北海道の酪農家に滞在し，酪農家の実態を肌で感じることができる。
②酪農家の現状，問題点を把握し説明できる。
③各自が問題点に対する解決策を提示できる。
④学生間の討論を通して意見を表明する能力を身につける。

＜学習方略＞
・5 人 1 組で 4 グループを作る。1 グループにつき 1 人の TA が付く。
・学生は，実習への参加と，各自による事前の準備（参考文献を調査）が必要。
・夜は早く寝なくてはならない。
・講義終了後に e ラーニングを利用して本講義の成果を発信する。

スケジュール
月曜日
10:00 札幌キャンパス出発（バス内でオリエンテーション）
畜産農家に到着後，ガイダンスとミニレクチャーを受ける。
晩に畜産農家の方を交えた ice breaking を行う。
火曜日
午前中は各グループ毎に酪農農家での作業。
午後は周辺の農協等を見学する。
水曜日
午前中は各グループ毎に酪農農家での作業。
午後は周辺の商工会議所または青年会議所をインタビューする。
晩は各グループ内で討論。
木曜日
午前中に各グループによる発表（問題点の提起）および全体討論。
午後は，各グループにおいて提起された問題点に対する解決策を討論。
夕方以降は，近隣の農家で地域の特産物を使った料理教室。
金曜日
午前中に全体による発表および討論。
可能であれば農家の方に発表を聞いていただいて意見を聞く。
4:00 札幌キャンパス到着
・講義終了後に e ラーニングを用いて講義の成果を発信する。

＜評価＞
行動目標①の評価方法
・作業やインタビューなどに積極的に参加しているか。（態度の評価）
・TA が主に評価する。　評価基準は，教員側がチェックシートなどとして用意する。
・30％
チェックシートの内容
1. 作業に積極的に参加したか
2. グループ討論に積極的に参加したか
3. 仲間と協調的に参加できたか

4. インタビューに積極的に取り組んだか
5. インタビューで必要な話を聞き出せたか

行動目標②の評価方法
・グループ討論（TA）や全体討論（教員，TA）での様子を，チェックシートなどを使って評価。
・内容の妥当性は，レポートにより評価。
・20％
行動目標③の評価方法
・“思考の論理性，解決策の妥当性”を，レポートの内容により評価。
・グループ討論や全体討論の様子を，教員や TA がチェックシートを使って評価。
・20％
行動目標④の評価方法
・グループ討論，全体討論の様子を，教員や TA がチェックシートを使って評価。
・30％



写真 23．グループ討論（グループ C）



写真 24．発表（グループ C）

グループ D のシラバス　（2009 年 11 月）

郭　　舜，美多　剛，下鶴　倫人，吉澤　真吾，
岸田　治，柴田　洋，田野　英里香，杉浦　里恵

＜科目名＞　総合科目「環境と人間」 講義題目「環境と社会のあいだ」

＜概要＞
地球環境問題の現実をふまえて人間と自然環境の関わりについて理解を深める。

＜一般目標＞
①自然と社会の関わりについて意見を持つことができるように環境問題の現状と課題について認識する。
②環境問題を理解するために科学的なものの見かたを身につける。

＜行動目標＞
①地球環境問題について調べ具体的に述べることができる。
②環境に関わる法律や制度について比較することができる。
③環境をめぐる社会問題について自分の立場を明確にし，論理的に意見を表明できる。
④科学的知見と政策を区別することができる。

＜学習方略＞
①授業のガイダンス（シラバス紹介）。クリッカーで意識調査。
②エコポイントを活用すべし !? (環境省の担当者の講演 (講演代 100,000 円), エコとは何か (エコバッグ，エコポイントについて))
③エコ反対 !? エコジャーナリストに講演依頼（講演代 100,000 円）。E-Learning を用いて意見を集める。
④日本のエネルギー政策について。経済産業省の担当者の招待講演（謝金 100,000 円）。
⑤エネルギーと安全。日本原子力機構の担当者の招待講演（謝金 100,000 円）。
⑥科学哲学から見た環境問題。科学哲学者の招待講演（謝金 100,000 円）。
⑦社会問題としての環境問題。中間レポート。TA が採点する。
⑧国際問題としての環境問題。（CO2 排出権の国家間の取引き。政治の側面から環境問題を見直す。）
⑨比較制度論。（法制度の側面から環境問題の国家間比較。）
⑩映画『不都合な真実』を上映。
⑪生物多様性の喪失の現状。
⑫水資源の利用と生態系破壊。NGO 担当者からの講演会（講演代 100,000 円）。
⑬外来生物について。生態系への影響。
⑭生物多様性をどう考えるか。レポート提出。TA が採点する。
⑮ディスカッション。（レポートを見て TA が代表者を何人かセレクトし，ディベートする。それに対する意見をクリッカーで投票する。）
・最終レポート

＜評価＞
能動的参加（15%）：クリッカーを用いて集計
レポート（85%）
・1 回目 (20%)：「エコバックまたは原発の是非について賛成・反対の立場を明らかにした上で，その理由を記せ。」（3000 字程度）
　評価基準：行動目標の 1 と 4 が達成されているかどうか
・2 回目 (20%)：「生物多様性を保全すべきであるという主張に対して賛否を明らかにし自分の意見を述べよ。」（3000 字程度）
　評価基準：行動目標の 1 と 4 が達成されているかどうか
・最終レポート (45%)：「社会と環境の関わりについて具体的な問題を取り上げ自分の意見を述べよ。その際，社会制度と環境の関係の多様性に留意すること。」（10000 字程度）
　評価基準：行動目標の 1 ～ 4 が達成されているかどうか



写真 25．グループ討論（グループ D）



写真 26．発表（グループ D）

グループ E のシラバス　（2009 年 11 月）

宮村　淳一，佐野　大輔，岡松　優子，佐藤　晴彦，
小林　広和，竹山　幸作，吉田　真奈美，土居　茂雄

＜科目名＞　総合科目「環境と人間」 講義題目「地球環境の未来像」

＜一般目標＞
人類が共有する地球環境の未来を守るために，温暖化，森林・エネルギー問題等の地球環境に関する諸問題を理解し，問題解決に向けて主体的に取り組む意識を持つ。

＜行動目標＞
①地球環境問題の経緯を説明できる。
②これまでの環境問題に対する取り組みについて主体的に評価し，レポートにまとめることができる。
③解決策を提案した上，それについて議論できる。

＜学習方略＞
1 回目：オリエンテーション
2 ～ 15 回目：基本的には 2 回ずつに分割
1 コマ目：各課題について講義　　課題：e- ラーニングを利用してレポート
2 コマ目：レポートの結果を紹介しながら討論
具体的な内容
①オリエンテーション
②地球環境総論
③④エネルギー，森林，温暖化
⑤　2 ～ 4 回目についてのレポート討論

⑥災害
⑦　6 回目についてのレポート討論
⑧食糧問題
⑨　8 回目についてのレポート討論
⑩医療問題
⑪　10 回目についてのレポート討論
⑫異文化
⑬　12 回目についてのレポート討論
⑭環境問題への IT の利用
⑮全体を通しての討論

＜評価＞
出席 15%
授業に対する積極的な参加 35%
（議論，小テスト，プレゼンテーション）
レポート（5 回）..... 50%
・形式が整っているか
・客観性（説得力があるか）
・独創性



写真 27．グループ討論（グループ E）



写真 28．発表（グループ E）